

□ 書 評 □

「急性代謝障害時の 経静脈栄養法」

〔編集〕 H. A. Lee

〔訳〕 山本 政勝 藤田 忠義 森末 新一  
谷川十三生 須山 忠和

新潟大学教授

武 藤 輝 一

すでに Allen と Lee による著書 “A Clinical Guide to Intravenous Nutrition” が内藤良一、谷川十三生、須山忠和の3氏により邦訳され『完全静注栄養』の表題で出版（医学書院）されたことがある。当時この3氏の研究心も含め経静脈栄養に寄せられる熱意に感心したものである。今回、関西医科大学外科の山本政勝教授を中心に前述の内藤氏に代って森末新一氏が加り5氏により Parenteral Nutrition in Acute Metabolic Illness が邦訳され『急性代謝障害時の経静脈栄養法』の表題で出版されることになった。編集者の Lee をはじめ Johnston, Wilkinson, Wretling その他の欧州の研究者により執筆されているが、この執筆者の中には栄養とくに経静脈栄養について数多くの業績を発表している人が少なくない。それだけに分かり易く、詳細に記述されている。

第1編では経静脈栄養を中心とした歴史が、第2編では経静脈栄養を実施するに当って必要な基礎的知識が、第3編では経静脈栄養が必要とされる外傷や手術侵襲時の代謝面からみた病態生理が述べられている。第4編では経静脈栄養の臨床でのあり方、第5編では経静脈栄養の実際の施行方法が記載されている。つまり第2、第3編は基礎で第4、第5編が臨床応用ということになる。そして第6編では耐容性および毒性研究について触れており編集者の本書作製に当っての慎重な配慮が窺われる。

もちろん、本書の中には最近著しい効果の認識されている高カロリー輸液に関してもくわしく述べられている。いや最終目的は完全静脈栄養におかれているようである。もし輸液の方法、手技、装置などについて図と共に記載されていたらもっと理

解されやすい完全なものとなったことと思うが、図などを豊富に入れたら膨大な本になってしまったかもしれない。

内容からみてこの方面の研究にたずさわる人達が参考書の1つとして備えておいたらと思う本である。臨床医の中でも経静脈栄養に関する知識を得ようとして初めてこの種の本をみる人にとっては、内容があまりにも多くて、驚き通読することをあきらめるかもしれない。こんな時にはまず第4、第5編を読みそのあとで、第2、第3編を読めば分かり易いのではないだろうか。

本邦における経静脈栄養に関する研究業績は欧米のそれに勝るとも劣らぬものであるが、外国語で発表されたものが少なかつただけに過去の業績は諸外国でそれほど認識されていない。本邦で経中心静脈高カロリー輸液が始められてから10年近くになり、完全静脈栄養研究会が発足してから満6年以上が過ぎた。経静脈栄養の進歩により数多くの命が救われているのはいうまでもない。翻訳にあたられた5氏の御苦勞に敬意を表しつつ、欧米に負けずにもっとこの方面の研究を進めて行かなければというのが本書を読みおえての感想である。

A 5 頁530 図41 1976 ¥8,000 千200  
＜医学書院刊＞